

国立民族学博物館の収蔵品 ④5

魚の形の首飾り



魚の形の首飾り。ヨルダン北西部サルトのものとして、高名な服飾品収集家ウィグダード・カワールに収集された。彼女もまた、パレスチナ人である。



パレスチナ中西部の港町ジャッファ（ヤーファ）の衣装とともに展示された、イエメン風の首飾り

現在はイスラエル領となっているガリラヤ地方北部の村クフル・ビルアムに生まれ、のちにメルキト派カトリック教会のガリラヤ大司教となったエリヤス・シャクールは、一九八四年に自身の半生を綴った自叙伝『Blood Brothers』を著している。イスラエル建国前、村で平和に暮らしていたアラブ人キリスト教徒たちの生活描写からはじまる本書で、彼は母親の服装について、以下のように描写している。「結婚に際して、父は母に首飾りを贈っていた。それは小さな真鍮の鎖を繋いだもので、魚と鳩の飾りがついていた」（前掲書P.三五）。魚はイエス・キリストの、鳩は聖霊の象徴であり、キリスト教徒にとって重要な意味を持つ。この首飾りは信仰の証であると同時に、神の守護を得るための護符としての役割も託されていたはずだ。

母親の首飾りの装飾部分について、素材名はあきらかにされていない。しかしながら、おそらく銀製であったことは容易に想像がつく。民博の西アジア展示場には、パレスチナやヨルダンの女性たちが身につけていた銀の装身具が衣装とともに展示されており、このなかにもさき魚の形のものがある。ヨルダン北西部の街サルトで収集されたものであるが、サルトは昔からキリスト教徒が多く住む、裕福な商人の街として有名であった。

古来シリアとアラビア半島を結ぶ中継地点であったパレスチナの銀

細工には、さまざまな地域の技術が反映されている。特に顕著であるのは、シリアのアレッポで活躍していたアルメニア人や、カフカスからの移民であるチェルケス、さらには遠く離れたイエメンの技術である。イエメンの精緻で重厚な銀細工はヒジャーズ地方のベドウィンに好まれたが、第一次世界大戦後にヒジャーズ地方の豪族であったハーシム家が支配者としてヨルダンに入ることによって、隣接するパレスチナにも彼ら好みの銀細工とその技術がもたらされることとなった。実際、民博の西アジア展示場でも、カプセル型のロケットがいくつもついたイエメン風の首飾りが展示されている。このロケット部分は開閉できるようにしており、中にクルアーンや聖書の文言、あるいは呪文を書いた紙片を入れ、邪視を避けるための護符として使われた。

さて、シャクール一家らクフル・ビルアムの住民たちは、イスラエル建国前夜に村にやってきたユダヤ人民兵に騙されて家屋と土地を奪われ、苦難の運命をたどる。村に帰還することなく亡くなった母親の首飾りは、形見として末の息子のエリヤスの手に渡った。一九四八年のイスラエル建国時、シャクール一家同様難民となったパレスチナ人の多くは、生活のために銀の装身具や伝統刺繍をほどこした衣装を売却した。今、民博でわれわれが目にするのできる装身具には、そんな哀しい歴史も秘められているのである。

（菅瀬 晶子）